

労働者委員 大島 幹敏

今年のお正月は天気も良く、穏やかで過ごしやすい日に恵まれた。寒いと外に出るのもおっくうになるが、暖冬のおかげでコートが無くても良いくらいで、近くの神社へのお参りもできた。お節をつつつきながらテレビを見たが、なんだか普段の特別番組の焼き直しとしか思えない。自分が年齢を重ねたせいか、かつてのようなお正月番組のワクワク感がなくなってしまったように感じてしまう。懐古主義ではないが、日本の伝統的なお正月が懐かしくなって、家族で双六遊びを行った。

子供のころは、とにかく早くゴールにたどり着きたいという思いでサイコロを振ったものだった。途中で、一回休みとか、上りのゴール前で振出しに戻る、というサイコロの目が出ると悲しくなってしまった。ルールとはいえ、なんと理不尽なことをさせるのかと、子供心ながらに思ったものである。一番に上がりにたどり着きたくて、何回も何回も繰り返し遊んでもらったことを思い出した。

団塊の世代のすぐ下で、小さい時からとにかく競争社会が当たり前であった。とにかく早く目標やゴールに到達することが何にもまして優先すると教え込まれていた。大回りをすることや一休みする、あるいは後ろを振り返る暇があれば、とにかく前に進めと、あらゆる事象に対して競争論理が優先していた様に思う。人に負けることは、自分を否定するようになっていたのかもしれない。

久々に双六をしてみて、ここで一休みとか、振出しに戻るという賽の目に対して、楽しみを感じている自分がそこにいた。目標に向かってがむしゃらに突き進むことから、「のんびりゆこう」という CM が流れたのは第一次オイルショックの時だった。それまでの価値観が 180 度変わるような考え方に、当時は違和感を覚えた。急にその様に言われても「ゆっくり」とは無縁だったように思う。そして、原油が 1 バレル 28 ドルを割るという逆のオイルショックの年のはじめに、「のんびりゆく」ということを双六が思い起こさせてくれることとなった。

ただ一直線に突き進むだけではなく、一休みをしたり、横道や裏山を進んだ後に振り返ってみれば、日々の生活に彩りが添えられ、より豊かなものとなるということを、遅ればせながら気づかされた正月だった。今日からは、目の前の事象に一喜一憂することなく、すべては天啓と受け入れるように心がけたいものだ。